初期日本語指導拠点校開設

～開設準備と拠点校の意義～

はじめに

令和4年4月 11 日、本市で初めての中学生のための初期日本語指導拠点校「江南教室」を浜松市立江南中学校内に開設した。そして令和５年 11 月末日までに「江南教室」に通級した生徒は 54 人、国籍はブラジル、ペルー、フィリピン、中国、ベトナム、インドネシア、ナイジェリア、チュニジアやパキスタンと9か国に上る。

通級した生徒が、修了式に、こんなスピーチをしている。

「この『江南教室』は小さな世界、It's a small world です。いろいろな国の仲間が助け合って日本語を学ぶ場所。ここで学べた私はラッキーでした。私は将来、外交官になって国と国を結ぶ仕事をしたいと思います。」

初期日本語指導拠点校の役割や意義が、各校の教職員に浸透していくことで、これからの本市の外国人児童生徒等教育がより良い方向に進んでいくことへの期待が膨らむ発表だった。

あらためて、これまでの経緯を振り返り、本市ならではの支援体制の構築に向けて動き出したい。

1．初期日本語指導拠点校ができるまで

(1) ワーキンググループ

開設の2年前から、ワーキンググループによる立ち上げ準備が始まった。ワーキングメンバーは外国人生徒が多く在籍する学校の校長を委員長に選出し、各校の日本語指導担当教師、外国人児童生徒教科指導員（会計年度任用職員：日本語指導が必要な児童生徒の取り出し指導を行う者）と浜松市教育委員会指導課教育総合支援センター（現：教育支援課）外国人支援グループ指導主事・計 10 人を委員として構成した。

(2) 進め方

他地区の初期指導教室を参考にしながらも、本市の実情に合った初期日本語指導拠点校の開設は、将来的に複数の拠点校が必要であることは避けられない課題だった。限られた公共交通機関を利用して広大な市域にある 49 の中学校から対象となる生徒が通級することになるからである。しかし、市としても、初めての取り組みであることから、まずは、1教室を開設し、教室運営をする中で成果と課題を検証しながら、増設を検討していくこととした。

(3) ワーキング1年次

ワーキングは、初期日本語指導拠点校が今、なぜ必要なのか、そして、どんな教育の場になるのかのイメージを、委員が共有するところから始まった。豊橋市教育委員会から講師を招いて、豊橋市での実践をお聞きし、ワーキングメンバーが豊橋市初期支援コース「みらい東」教室を視察した。視察後は、感想や疑問点をもとに開設場所や通級期間、指導プログラム、学校との連携の仕方など、根拠となる考えや具体的な方法を Q & A で作成し、最終的にはガイドブックとして学校に配布することとした。

(4) ワーキング 2 年次

開設予定の江南中学校の教務主任を委員に加え、日課の検討を行った。通級する生徒の登校時刻も考慮し、江南中学校の生徒と一緒の日課で生活できるよう校内で調整をした。

次に、指導プログラムについての検討だ。日本語指

導を中心としながらも、在籍校への円滑な適応を考えたとき、少なからず教科の学習に触れておく必要があるのではないかと委員から意見が上がった。未履修の学習内容があることも懸念されたため、特に数学については、レディネスを把握し、補習も行っていく必要があるといった意見が出された。また、豊橋市の「みらい東」では、リコーダーや裁縫なども取り入れていると聞き、技能教科で行う活動もトピック的に入れていくことも検討した。

最終的に、学校生活への適応指導及び日本語基礎指導を 120 時間、数学 30 時間、英語 20 時間、社会 12 時間、学活 18 時間、計 200 時間としてプログラムを構築していった。

実際の指導に当たっては、このプログラムをベースにしながら、通級する生徒の定着状況を踏まえ、時数及び内容は柔軟に扱うものとした。

(5) 日本語プログラム

10 週間の日本語プログラムは次のように構成されている。【表1】

<table>
<tr><td>段階</td><td colspan="2">Hop</td><td colspan="3">Step</td><td colspan="5">Jump</td></tr>
<tr><td>週</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td></tr>
<tr><td>大目標</td><td colspan="2">江南教室の生活に慣れよう</td><td colspan="3">日本の生活に慣れよう</td><td colspan="5">在籍校の生活に近づこう</td></tr>
<tr><td>文字・語彙</td><td colspan="2">ひらがな</td><td colspan="2">カタカナ</td><td colspan="8">漢字(小1-80字+小2-20字)</td></tr>
<tr><td>学習内容</td><td colspan="2">・初期適応指導
・学校生活で使うことば</td><td colspan="3">・形容詞
・動詞
・語彙を増やす
・JSL教科学習</td><td colspan="5">・形容詞や動詞の活用
・接続詞　・文章読解
・JSL教科学習
・スピーチ発表準備</td></tr>
</table>

(6) その他の準備

外国人支援グループではこのワーキングと並行して、施設設備のハード面と担任はじめ指導スタッフのソフト面での準備を進めていった。江南中学校は、外国人生徒等の在籍率が高く、校内の外国人児童生徒等への支援体制も整っている学校である。生徒も、教員も国籍問わず外国人を受け入れることへの抵抗感はなかった。

ハード面については、教室の場所は、生徒が通級しやすく、動線が複雑にならないよう配慮した。その結果、昇降口の横にある 1 階の教室を使い、隣にある部屋は、指導者が簡易な打ち合わせをしたり、保護者が来校した時に対応したりする指導員室として利用することとした。同じ階には保健室、配膳室があり、体調不良や怪我の対応、給食の準備・片付けも効率的に行えることが期待できた。（ただし、昼食については、1年次は給食対応としたが、配膳指導や食事指導、会計システムへの入力事務に課題や負担が多く、2年次からは弁当持参としている。）さらに、机やいす、長机などの備品は江南中学校にあるものを活用することができた。

一方ソフト面については、これまで教科指導員として長年外国人生徒への指導に携わってきた職員を、拠点校配属の担当教員として配置した。日本語基礎指導や日本語と教科の統合学習について、知識と経験があり、ワーキングのスタート時から参加して「江南教室」の立ち上げに尽力した人物である。次に、担任を支えるスタッフとして、教科指導員と就学サポーター（バイリンガル）（いずれも会計年度任用職員）を複数配置することとした。教員同士の打ち合わせ時間を確保するため、週 2 時間、日本語基礎指導を委託する NPO の支援者の指導時間をプログラムに組み込んだ。このように、拠点校開設は新規事業であるが、人員についてはこれまでの本市の支援体制を利用し、人的配置・派遣を調整することとした。

さらに、年度の後半は教育委員会各課や、校長会を通じての各校への周知など準備を進めていった。しかし、開設日を令和4年4月 11 日と設定したものの、3月の初めには、対象生徒がまだ0人という状況で、果たして通級する生徒が編入するのかどうか一抹の不安を覚えたことを昨日のことのように覚えている。幸い、4人の対象生徒が第1期生として「江南教室」に通うことになった。国籍は日本が3人（フィリピン、パキスタン、中国につながる）とフィリピンが1人だった。

2. 初期日本語指導拠点校「江南教室」の取り組み

(1) 開校式

令和4年4月 11 日、初期日本語指導拠点校「江南教室」の開校式を行った。本市で初めての拠点校開設であるため、教育長をはじめ拠点校の学校長と通級生徒が在籍する学校長にも出席を依頼した。

【写真1】（静岡新聞　令和4年4月12日掲載）

宮﨑教育長（右）から激励を受ける生徒＝浜松市中央区の江南中

生徒は緊張した面持ちで名前と出身地を母語や片言の日本語で自己紹介した。担任は、熱い思いを込めて「江南教室」で学ぶ意義等を、スライドを見せながら説明した。この時の担任の言葉は温かく、力強く生徒の心に響いたことだろう。

日本語の習得には時間がかかります。
江南教室は日本語がわからない中学生のための教室です。10 週間、月曜日から木曜日まで日本語を集中的に学習し、金曜日は自分の中学校で勉強します。江南教室は、みなさんが、自信をつけていく場所です。　　（中略）
【約束します。】
※みなさんの今までの経験を無駄にしません。
※今のあなたを大切にします。
※ 10 週間後　希望をもったみなさんを笑顔で送り出します。

その後の入級式は、拠点校の学校長と指導者、生徒、保護者、教育支援課外国人支援グループ指導主事が出席することとした。10 週間後の修了式には、これに加えて在籍校からも担任や日本語指導担当に出席してもらうこととし、引継ぎの時間を設けている。

(2) 開校後の対応と指導

「江南教室」開設から 1 か月程は、外国人支援グループの指導主事や相談員（バイリンガル）が「業務応援」として、教室の立ち上げのサポートをした。編入があるたびに毎週月曜日の受け入れとしていたが、通級のタイミングがずれるため、日本語力に差が生じてくる。常に一斉の授業は行えないため、日本語の定着状況で小グループに分け、支援した。毎週の受け入れでは、今後日本語レベルの差に指導者が対応できなくなる心配があったため、2年目からは受け入れを隔週に設定し直した。小グループでの指導は数学科でも行った。来日前の履修内容の差が大きく、指導内容を個に応じたものに対応する必要があったためである。日本語で問われていることが、通訳することでわかる生徒は、就学サポーター（バイリンガル）の支援を得て、在籍校で使用している問題集を用い、学年相当の問題に取り組んだ。一方、社会科や英語科は、教科の枠組みに縛られない教科横断的なトピックを設定した。母語も日本語レベルも違う生徒が互いに教え合い、学び合う力が育くまれている。

(3) 学校で学ぶということ

江南教室の 1 日は、始業前に行う「朝読書」と「教室内清掃」で始まる。曜日によって交互に行っている。授業開始時刻前には席に着き約 1 分間の黙想を行う。こうした活動は市内中学校でも取り組んでいることである。朝の会や帰りの会の司会をしたり、黒板を拭いたり配付物を配ったりする係活動も分担して行う。こうして江南教室では常に在籍校での生活への意識付けを行っているのが特徴だ。さらに、金曜日に在籍校へ登校する生徒たちに在籍校と連携の上、「チャレンジ」といった課題を出し、習った日本語を使って在籍クラスの担任や仲間と交流することを宿題とした。これにより週を追

うごとに日本語での会話や日記などの振り返りで日本語の表記が増えていった。

日本語ゼロで入った生徒たちは、10週間の修了時には概ね平仮名、片仮名、低学年の漢字の学習を経験する。完全に習得できた生徒もいればまだまだ不十分な生徒もいる。個人差はあるが、江南教室に通う子供たちは、日本語の勉強に前向きだ。担任はじめ指導者が話すやさしい日本語に耳を傾けて、目線を合わせて聞こうとする。間違えても何度も発音し、覚えようとする。習った日本語をすぐに使おうとする。わからない言葉を母語に翻訳して理解しようとする。「自分辞書」を片手に、新しく習った言葉を書き留めていく。このように、生徒たちは、全てを教えてもらうだけでなく、自分なりの学び方も徐々に身に付けていくのである。

(4) 心のケア

一方、生徒たちの心情面は常に穏やかとは言えない場合もある。ほとんどが家庭の事情により、来日を余儀なくされた生徒たち。これまで一緒に過ごしてきた友達や親せきと別れ、不安を抱えている場合も多い。父や母と数年ぶりにあるいは、初めて一緒に暮らす生徒は、自分自身の感情を素直に出せない場合もある。コロナ禍で学校に通えない期間もあったことから、学習内容に大きな後れを取っている生徒もいる。こうした生徒の不安や不満は、江南教室での生活に慣れてくるに従って表れてくる。指導者は、生徒の揺れる気持ちを丁寧に聴き取り、必要に応じてスクールカウンセリングを勧めている。在籍校とも情報共有を行い、生徒が安心して江南教室と在籍校に通うことができるようにしていく。

生徒指導上の問題が発生した時は、教育委員会も保護者面談を行ったり、ケース会議を行ったり、必要に応じて児童相談所等と連携したりするなど、後方支援を行っている。

(5) 教科指導員巡回訪問

さらに、江南教室と在籍校をつなぐ取り組みに、金曜日の在籍校巡回訪問がある。江南教室で指導に当たっている教科指導員が金曜日に在籍校を訪問し、生徒の様子を伝えたり、在籍校での生徒の様子を観察したりする。在籍校の担任や日本語指導担当、管理職との話し合いの時間も設け、10週間をかけて少しずつ、通級終了後の在籍校での支援体制をどのようにしていくか相談したり、在籍クラスで配慮してほしいことを伝えたりしている。

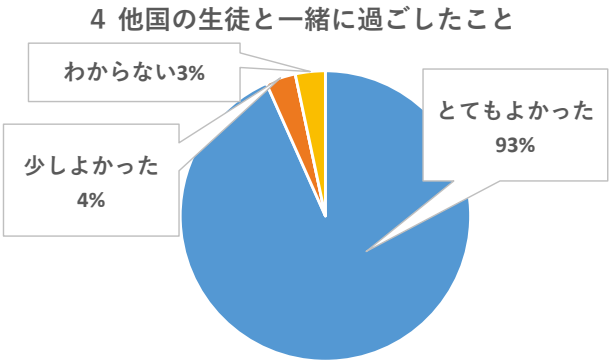
(6) キャリア教育

キャリア教育の一環として、ロールモデルを江南教室に派遣し、生徒は、生き方や夢をもつことの大切さについての講話を聞いた。また、マニラ日本人学校に通う生徒とリモートによる交流会を実施し、互いの学校や生活の様子を発表し合った。生徒たちは、「異国で暮らす」という共通点から、生活上の不便さや新しい物事を見聞きする嬉しさに共感していた。【写真2、3】

(7) 通級アンケート

江南教室を修了するときに行う生徒及び保護者アンケートでは、ほとんどの生徒や保護者が「不安がなくなった」と回答している。生徒たちは、何よりもいろいろな学校や国の仲間と出会い、同様な境遇にある仲間と励まし合いながら一緒に学べたことに喜びを感じていることが分かった。

【グラフ1】



(8) 学校の特色ある活動の一つという捉え

初期日本語指導拠点校「江南教室」は単なる日本語を学ぶ教室ではない。外国人生徒同士の仲間づくりや異文化交流の場であること、そして、「これから日本で、日本語を学び、自分らしさを大切に生きていくという『覚悟』をもつスタートライン」なのだ。また、初期日本語指導拠点校の位置づけについて開設前と現在と変わってきたことがある。それは、この初期日本語指導拠点校「江南教室」は、教育委員会がつくった日本語教室だけではないということだ。生徒が日本の中学校の雰囲気を肌で感じ、安心して日本語で学んでいくためには、拠点校としての学校の在り方、そしてそこの教職員の意識が鍵となるのである。つまり、初期日本語指導拠点そのものが開設したその中学校の「特色ある活動」だと意識することが大切なのだ。江南中学校の先生方が朝、正門や昇降口で全校生徒はもとより、通級生も受け入れ、笑顔で「おはよう」と声を掛けている。生徒たちもそれに応える。江南中学校長の入級式の挨拶には、いつも「月曜日から木曜日、ここがあなたの学校です」とある。「ここに居て、ここに来ていいのだ」という安心感を生徒に与えてくれている。だからこそ、これまで途中で通級をやめた生徒は一人としていない。

3. これからの初期日本語指導拠点校

(1) 成果

①効果的な日本語基礎の集中指導
②仲間との学び合いの仕方を学ぶ場
③より深い生徒同士のコミュニティの形成
④在籍校への負担軽減

(2) 課題

①週 1 回及び通級修了後の在籍校での支援体制
②生徒自身が抱える問題への対応
③入級を希望しないケースの解消
④教員及び指導スタッフの配置
⑤小学校高学年の初期日本語指導の在り方

実践を重ねながら成果を検証し、課題解決に向け、学校や関係機関と連携し、より良い方向に進んでいきたい。

初期日本語指導拠点校の目的は「在籍校への適応を図る」ことである。さらに、日本語の習得はもとより、進路選択の幅を広げていくことも次の大きな課題である。そのためには、修了した生徒の学びを在籍校につなぎ、学校内の支援体制をより充実していくことが大切である。

これからの初期日本語指導拠点校は、多くの日本語ゼロの生徒たちを温かく受け入れ、在籍校との連携を一層大切にし、夢や希望をもつ生徒を在籍校へ送り出していきたいと思う。

おわりに

教育支援課外国人支援グループでは、浜松市立小中学校に編入を希望する外国人児童生徒等に「就学ガイダンス」を行っている。日本の学校制度や保護者の責任や協力することなどの説明をするが、一番伝えたいことは「子供が日本での生活に馴染み、夢や希望をもって、たくましく生きていく力を共に育てましょう」ということだ。日本語を習得することが目的ではなく、“日本語を使い、日本語を通して多くの人と関わる中で、自分らしさを発見したり、実現したりしてほしい、”と、切に願う。

浜松市教育委員会は、時代を見据え、少し先の未来を想像し、支援体制の構築と充実を今後も目指していきたい。